



鹿沼の自然・栃木の旅

月報第31号

(2015年2月)



『動物界の不思議』
詳細は4頁から

北光クラブ
自然観察クラブ 鹿沼



田沼・唐沢山より諏訪岳ハイキング
～国史跡・唐沢山城跡を訪ねて～

唐沢山城の原形は、940（天慶3）年、藤原秀郷により築かれたとされます。秀郷の子孫である藤原姓足利氏の滅亡後は、佐野氏が勢力を広げ、戦国時代には唐沢山城を修築して居城としました。1600（慶長5）年に佐野信吉が平城の佐野城へ居城を移したため、唐沢山城は廃城となりました。唐沢山城が廃城となるまで、佐野は、経済的中心地である天明（天命）宿と、政治的中心地である唐沢山城下が併存する、二元的な構造を特徴としていました。

唐沢下鳥居に車を置いて「関東ふれあいの道」を登り、唐沢山城跡を見学しましょう。城郭は、山頂から東西に延びる尾根や山腹を巧みに利用して、堀や土塁が設けられています。現在、山頂の本丸跡には唐沢山神社がありますが、その南側にある高さ8mもの高石垣は関東でも数少ないものです。続いて今回の最高峰諏訪岳（323m）まで縦走します。この山は形がきれいなことから「中村富士」とも呼ばれています。下山して東武佐野線多田駅へ。ここから田沼駅までひと駅、電車に乗るのも一興ですね。その後村檜神社にも立ち寄ってみましょう。本殿は国の重要文化財で三間社春日造、屋根は県内に唯一現存する檜皮葺きで、1553（天文22）年の建立です。

本号の内容

山行案内	田沼・唐沢山より諏訪岳ハイキング～国史跡・唐沢山城跡を訪ねて～	2
次回予告	鹿沼・鳴蟲山ハイキング～加蘇と西大芦にまたがる名山～	2
表紙の本	谷田專治著『動物界の不思議』	4
活動報告	茶臼山・毘沙門山ハイキングと今市宿・二宮尊徳に因む社寺史跡めぐり	13
Photo Report 栃木	古賀志山レポート	16
探訪・鹿沼の鎮守と古木②	板荷大原の天満宮と柵ボッチ	18
山書談話室		21
愛書家のひとりごと		22

※ 左のようにご案内したのですが、本誌発行が遅れ、期日を過ぎてしまいました。報告は次号を楽しみにしていただくとして、その次の山行をご案内します。

次回予告

鹿沼・鳴蟲山ハイキング ～加蘇と西大芦にまたがる名山～

日 時：3月8日（日）AM7:00 北小西門集合（解散はPM4:00 頃）

行 程：鹿沼北小——加園——下久我——法長内^①——下久我——引田——
片野道——林道終点^①（20分）……鉄塔（20分）……小ピーク
（20分）……紅白鉄塔（5分）……鳴蟲山（5分）……紅白鉄塔
（20分）……556m ピーク（20分）……464m ピーク（20分）
……鉄塔（20分）……法長内^①——下久我——引田——片野道——
林道終点^①——片野道——引田——下沢——鹿沼北小

服 装：長袖シャツ、長ズボン、防寒着、帽子、軍手、軽登山靴または運動靴
持ち物：リュックサック、水筒（ポット）、弁当、おやつ、雨具、お手ふき、
ハンカチ、ちり紙、筆記用具、レジ袋、レジャーシート

必要に応じて：双眼鏡、ルーペ、カメラ、ヘッドランプ、ストック、
参考書（栃木の山 150、栃木百名山ガイドブック、）、
1/25,000 地形図は「鹿沼」「文挾」

会 費：ガソリン代等として おとな 200 円、子ども 100 円、
今年度初参加の方は保険料 800 円（3 月まで）。

申し込み：3月6日（金）までに、チャレンジスクール申込書で北光クラブ、
または阿部まで。

問合せ：電話 090-1884-3774（阿部）



※ 年間計画にある「陣馬山より小仏峠」は4月5日（日）に春休み特別企画として
計画する予定です。お楽しみに！

谷田專治著『動物界の不思議』

(昭和13年12月17日・借成社発行)

著者のことば

科学は難かしいもの、無味乾燥なものと考えた時代は過ぎ去りました。科学は学者の専売でもなければ、大学や研究室からばかり生れるものではありません。自然界に対して純な少年諸君の抱く疑問こそ科学への第一歩であり、自然現象に対する無限の興味こそ科学者の魂ではないでしょうか。

動くものに対する興味は無限です。日常接している動物界の現象だけでも、どれだけの謎があり、どれだけの驚異を感じずでしょうか。その総ての謎を解き、質問に答えることは容易なことではありません。不可能と言っても過言ではないでしょう。ですから少年諸君自らが自然界における謎の扉を開こうとして努力する態度を養っていただきたいと願うものです。

この書は動物界の不思議の一断片に過ぎませんが、少年諸君に最も親しみある身近な動物の観察から、宇宙の謎に興味を持ち、大自然の神秘を窺いてやろうという気持ちがこの書によって少しでも動くならば、又、兎角無味乾燥になりがちな理科や博物の補いに、課外読本として役立つならば、多少でも教育に関係ある身として此の上もない幸いと思ひ筆を執った次第です。

谷田專治

動物界の不思議

飛ぶ獣と飛べぬ鳥

獣の空中滑走

普通、獣というと犬や猫、或いは牛や馬のように、歩くか走るのが主なる運動法です。兎がピョンピョン飛び廻るといいますが、これも本当に飛ぶのではなく、跳るのである。併し数多い獣の中には、本当に飛ぶ物もあります。

「ムササビ」という大きき50糶ばかりの動物があります。これは樹の上に生活をしてい

からだ わき まく よこ の まえあし うろあし あいだ
 て体の側には膜が横に伸び、前肢と後肢との間に
 ひろが まくり まくろ よう いっぽう き えだ
 拡っています。この膜を利用して、一方の樹の枝から
 たほう えだ と うつ で き しか、これも鳥の
 他方の枝へ飛び移ることが出来ます。併し、これも鳥の
 飛ぶのとは違って、飛行機が空中滑走するのと同じです。
 たか ところ ひく ところ め と お ちよど
 高い所から低い所を目がけて飛び下りるので、膜は丁度
 パラシュートのような役目をするのです。



“空飛ぶ”皮布団”
ムササビ

どうぶつえん さる メートル メートルくらい えだ えだ と うつ み
 動物園で猿が1米か2米位はなれた枝から枝へ飛び移るのを見るでしょう。ムサ
 サビの飛行は、この猿の跳躍の進歩したものと考えることが出来ます。

「モモンガ」という17糶ばかりの小さい動物も、ムササビと同じような飛行家の仲間
 です。

にっぽん どうぶつ ひこうじゅう どうぶつ
 日本にはいない動物ですが、「コベゴウ」という飛行獣があります。この動物はマレ
 はんとう や、スマトラ、ボルネオ辺の森の中に棲んでいて、木から木へと飛び廻ります。
 ねこぐらい ちい けもの ひとと メートル メートルくらい と い
 猫位の小さい獣ですが、一飛びで60米から70米位も飛んで行きます。

コベゴウも胴の横の皮膚が伸びて、ふろしきを上げたようになっています。そしてこの
 まく まえあし うろあし あいだ お ひろ ところまで だ
 膜は、前肢と後肢との間ばかりでなく、尾のところまで広がっていて、子供を抱いたま
 ま自由に飛行することが出来るのです。眠る時は、木の枝に四肢をかけ、ぶら下って
 ねむ ひこう で き ねむ と き き えだ よつあし さが
 眠るという面白い動物です。

獣類の飛行選手

どり ほんとう と けもの し こうもり けもの と
 鳥のように本当に飛ぶ獣は、みなさんの知っている蝙蝠です。この獣はあまり飛ぶ
 じょうずなので、昔から不思議な動物とされていました。

こうもり にちゅう いわ われめ き ほらあな ゆうがた よる
 蝙蝠は日中は岩の割目や、樹の洞穴にかくれています。夕方から夜にかけて
 と だ おしるい たら た またこうもり なか くだもの た なんべい
 飛び出して虫類を捕えて食べます。又蝙蝠の中には果物を食べるものや、南米あた
 りにいるのでは、昆虫を食べると同時に、人や家畜の血を吸うもの、鳥を食べるもの、
 うお とるもの などもあります。一般には飛びながら害虫を食べてくれますから、人間
 たいへんゆうえき どうぶつ
 には大変有益な動物なのです。

こうもり からだ み まえあし てのひら ほね ゆび ほね ひじょう ほそ
 蝙蝠の体を見ると、前肢の掌の骨と、指の骨とが非常に細
 なが の あいだ うす まく は
 長く伸びて、その間に薄い膜が張られています。この
 まく くら の うろあし そどがわ およ
 膜は更に伸びて、後肢の外側にまで及んでいますか
 こ、これと とり つばさ つか じゆうじざい こうちゆう
 ら、これを鳥の翼のように使って自由自在に空中を
 ひこう もちろん はや けもの なか ま
 飛行します。勿論あまり速くはありませんが、獣の仲間
 だいいち ひこうか
 では第一の飛行家です。



街なかで普通に見られる
アブラコウモリ

ランニングをする鳥

鳥という鳩でも燕でも、又は歩いてばかりいる鶏でも、皆飛行家ばかりのように考えていますが、鳥の間でも飛べないものがあります。



ダチョウ

鳥の中で一番大きい駝鳥は、翼を持っては居りますが、その翼は体の割合に非常に小さくて、全然飛ぶ用をしません。その代りに脚がとても太く長くなっていて、丈夫です。走る手が上手になり、馬よりも早い速さで走ります。走る時はこの申わけのようにしている小さな翼を拡げて、風を受け、猶一層早く走ります。ですから駝鳥の翼は飛ぶ為ではなく、日本の昔の船の帆のような働きをしているのであります。

駝鳥は体に似合わぬ奇麗な羽毛を持っているので、今ではアフリカやアメリカ等の各地で飼養されています。

全く飛べない鳥

もっと変わった鳥では、全然翼のないものがあります。従って飛びたくとも飛べないわけです。それはニュージーランドに棲む「キウイ」という変な名前の鳥で、歩くとき出来ない鳥です。

体は鶏ぐらいの大きさと、真黒い色をしています。昼の間は自分の造った土の中の孔へ隠れていて、夜になると走りまわり、細長い嘴で食物を捜して歩きます。「キウイ」という名前は、その鳥の啼声からつけられたものだそうです。

翼が全然なくて、飛ぶことが出来ないのでは、「ヒクイドリ」も仲間の一つです。また今ではニュージーランドから化石になって出て来る「モア」という昔の鳥も飛べなかったのです。モアの化石を見ると、大きいのは4米もありますから、今まで生き残っていれば、世界で一番大きい鳥と云われるでしょう。(後略)



キウイ

陸を散歩する魚

空気を呼吸する魚

動物学の方で、魚の中に肺魚類と呼ばれる一群があります。次の図はその中の一つ、セラトダスと云う魚です。この肺魚類に入れられる魚は、水のある時は普通の魚と同じように鰓で



ハイギョの一種
ネオセラトダス・フォルステリ

(次ページへ続く)

水を呼吸していますが、周りが乾燥して水が少くなると、沼の底等の泥や砂の中にもぐりこんで、今度は鰓で空気を呼吸するのです。ですからこんな種類の魚は、可成り長く水へ入らないでいても、生きていられるわけです。

丘の上を歩く魚

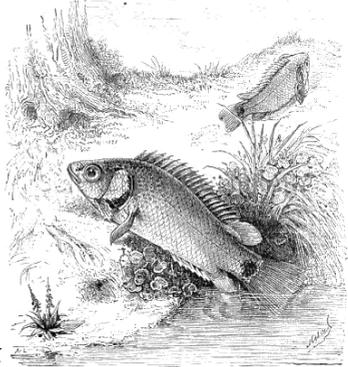
自分から進んで陸へ上る魚に、キノボリウオというのがあります。馬來半島や、その付近の島の川に棲んでいる魚で、日本には居りません。

この魚は鰓蓋のどこの骨や、その少し後の棘とか、胸鰭でもって草をかき分けたり、土をつばったりして川から陸へ上って来ます。そして陸上の小虫を捕えて食べるのです。こんな魚の居る所に行けば魚は釣るものではなく、拾うものになります。

昔は山芋が変ってウナギになると云ったものです。それは川や沼等と少しも水の通っていない小さな水溜りに、ウナギがよくいるからこんなことを云ったのです。併しこれは山芋が変ってウナギになったのではなくて、ウナギが水の殆んどないような処を、人の知らぬ間に匍って来て、水溜りへ入ったものなのです。昔の人はウナギがそんな水のないような地面を匍うことを知らなかったので、山芋が変ったのだとばかり思ったのです。

こんなことを云われるように、ウナギやドジョウは、よく殆んど水のない溝や堀を匍っているを見掛けることがあります。然しこれ等は只、雨降りの時とか、多少の湿気のあるところを匍うことが出来るだけで、乾いている地面では、とても動きがとれないのです。キノボリウオはウナギやドジョウと違って、全く乾いている土地でも平気で歩きます。又日中太陽がカンカン照りつけている時でも歩くことが出来るのです。勿論普通は昼の間は静かに川で休んでいて、夜か朝方に陸へ上って餌を取るものです。

キノボリウオはどうして水から上っても死なずにいられるかと云いますと、それは鰓の後の所に特別な、水を貯めることの出来る所があるからなのです。つまり陸へ上っても水を運んで歩いているようなもので、呼吸には一向差支えないのです。



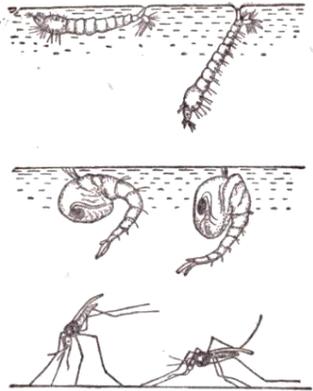
キノボリウオ

恐ろしい蚊の空襲

蚊の持つて来る伝染病菌

専門家の話によると、蚊の種類は300に近いと言っています。然し大別してみると3つにすることが出来ます。一つは私達の家にも普通で、壁などに止まる時は必ず体をその面に平行して止まる家蚊の類、一つは、頭上に幅広い扁平な鱗片があっ

て、^{いっけん ひじょう つつく あし ふし しろ わ はら}一見非常に美しく、^{むね}肢の節に白い輪があり、^{むね}腹から胸にかけて銀白色の条と斑点のあるシマカの類。もう一つはアノフェレス蚊又はハマダラ蚊とよばれる類で、^{はね}翅に斑紋があり平なところへ止まった時は、^あ腹部を斜めに上げるものです。アノフェレス蚊は幼虫、^{とき}即ちボウフラの時も蛹の時も他の蚊の幼虫や蛹とは違った様子で水面に静止しますから、^{すゝ}直ぐ見分けられます。



ハマダラ蚊(左)と普通の蚊の違い

こうした^{くべつ}区別があるばかりか、その3つの類は、それぞれ異った病気の^{きんねん}伝播者となるのです。近年になって分ったことですが、^{なか}その中で最も注意すべきものはアノフェレス蚊で、この蚊が恐るべきマラリア熱病の病原体を^{はな}伝播するのです。

マラリア熱というものも、^{みっか}三日熱・^{よっか}四日熱・^{ねったい}熱帯熱の3種の病気に^{くべつ}区別され、^{ないち}内地では三日熱、台湾では3種とも^{うち}流行します。その中、^{もつと}熱帯熱は最も悪性で、一度^だ感染すると容易になおらず、^た死ぬ人も少なくありません。蚊が^か人体をさした時、蚊の^だ唾液腺に入っている病原虫が人の血液の中に入り、^{おこ}どんどん繁殖する為に^{むか}起る病気で、昔は^いオコリと云っていました。

マラリア熱の特効薬が発見されなかった時代には、その被害が^{ものすご}どんなに物凄いののであったかという^{れい}こと例として、^あ或者学者は、^かかつてヨーロッパの大半を^{たいはん}占めていたローマ大帝国が滅亡したのは、^ど奴隷と共に^{ねったい}熱帯地方から^{あくせい}悪性のマラリアが^ゆ輸入されて、^{じん}ローマ人の間に^い拡がった為であると^{げんごん}さ言っています。^{げんごん}現今でもイタリーはマラリア病で大変苦しめられているのです。1900年頃までは、^{まいとし}毎年この病気で死ぬ人が1万人乃至2万人に達していましたが、^{せいふ}政府では^{ゆうこうやく}有効薬の^{さい}キニーネ剤を民間に^{じんかん}実費で^{じつ}供給したので、^{きんちか}やっと少くなりましたがそれでも1年に3000人近くの^{しぼうしや}死亡者があるそうです。

高飛びの上手な蚤

ペスト病と蚤

皆さんは、既にペスト病という恐ろしい病気の^{おち}ことをお聞きになったことがあると思いま^{おち}す。この病気は元々、^{おち}アジアから起ったと言われていますが、^い何処も^ど決定されていません。然し色々の事から学者が^{おち}研究したところによると、^{おち}ヒマラヤの北側の南チベットが^{おち}源であろうということです。

ヨーロッパでは西暦紀元527年から565年の長い間に互って、^{おち}ペストが各地に^{おち}拡がり、^{おち}沢山の人が死んだことがあります。其の後も、^{おち}殊14世紀に^{おち}大流行があつて、

(次ページへ続く)

2500万人の命が奪われたのです。その数は当時のヨーロッパの全人口の4分の1に相当していたという驚くべき惨禍だったのです。

日本では明治27年に、最近皇軍が迅速に陥落させた広東の近くの香港にペストが流行したために、台湾から日本内地へと魔の手の延びるように拡がって来たことがあります。其の後も度々ペストが侵入して来て、3000人近くの人が死んでしまったのです。尊い人の命を失ったばかりか、ペストをなくす為に大変な金をつかい、又海外との貿易を断ったりして、我国の蒙った損害は算えきることが出来ないものでありました。

南チベットに起ったらしいペストは、印度にも侵入して、僅か10ヶ月の間に500万人という人命が失われたことがあります。その惨状は地震や戦争どころではありません。今でも印度はペスト病の本場で、常にこの病気に悩まされています。

被害のおかった国々では、ペスト病の起る原因を調べる必要にせまられたのです。必要こそは発見の母であり、発明の父であります。ペストの原因は我国の北里柴三郎博士や、印度に行つて研究した英国のグリーン・リントンという学者によって、先ず鼠と関係のあることが知られ、次いでその蚤が病原菌を運ぶということが確かめられました。

人間界にペストの流行する前には必ず鼠の仲間にペストが流行することも分りました。この病気は本当は人間の病気ではなく、鼠の病気であるのが、人間にまで伝染するものなのです。

ペストには色々の種類があつて、淋巴腺がひどく腫れる腺ペスト、皮膚に大きなおできの出来る皮膚ペスト、肺に起る肺ペストなどと区別されます。この中で最も多いのは腺ペストで、それが鼠蚤と直接関係しているのです。印度のペストは大部分この鼠蚤が犯人です。

日本では夏の末から秋の間に割合にこの鼠蚤が多いのです。鼠の間にペストが流行し、鼠がだんだん死んで少くなると、蚤は血を吸うものがなくなるので人間を襲います。すると人間の社会にもペストが侵入して来るわけです。



ノミ

十二支動物の話

鼠(子)の話

鼠が運ぶ病気

この悪戯者の鼠、世界を我物顔に暴し廻っている鼠の害は、直接のものだけでも前に挙げたように大変なものです。それよりもっと困る厄介なことは、病気を拡げる間接の害です。鼠が運ぶ病気！ これこそ本当に恐るべきものです。

(次ページへ続く)

ペスト。おおなんと嫌な病気でしよ。突然悪寒がし高い熱が出て、頭が痛み、吐き
け
けがあり、灼けつくような感じがして、皮膚は乾いて黒紫色になり、多くは急に死ぬ病
け
気です。この病気に患ると、100人の中4、50人は死ぬのです。印度などでは、100
にんちゆう
人中90人位は死んでしまいます。このようにペストは死亡率が高い上に、非常に伝
せん
染しやすい恐ろしい病気です。

この嫌な病気も本来は鼠の病気ですが、それが人間にも伝染するのです。

我が国へはいつも上海や印度あたりから来る荷物にまぎれこんでいた鼠が持って
ねずみ
来ます。この鼠についている蚤が人間をさして伝染させます。

神戸や横浜のように、外国の船が出入りする所では、時々ペスト患者が発生しま
しよ
す。ペストが発生したとなると、大騒ぎで鼠を検査し、鼠を殺すことに力を注ぎます。
こうべ
神戸でペストが発生した時、鼠を買い上げて極力伝染を防いだことがありました。そ
のとき
の時1年間に買い上げた鼠の数は、実に人口の2倍に達したということです。

昔からペストは人を悩まして来ました。14世紀頃ヨーロッパにペストの大流行があ
り、この病の為に2500万の人が斃れ、為にヨーロッパの人口の4分の1が減ったと
いわれています。

イギリスはやどき
英吉利に流行った時は、1664年から1666年までの短い間に、ロンドンだけで9
まんにんちか
万人近い死人が出たと伝えられています。

鼠に噛みつかれると、鼠咬症という病気になります。

これは人が鼠に咬みつかれた時、鼠の体の中にある
びょうげんきん
病原菌が人間の体に入るため、熱が高まり、咬まれた
ふきん
附近の皮膚にブツブツの出来る病気です。然しペスト
ほどもうれつ
程猛烈な悪性の病気でないということは、不幸中の幸です。



クマネズミ

この外、鼠が運ぶ病気には、出血黄痘病とか、恙虫病とかいう嫌なものがありま
す。

いぬ いぬ はなし 犬 (戌) の話

恐ろしい狂犬病

ほんとう
本当に忠実な、とても役に立つ、人間の昔からのよいお友達の犬も、いちどきょうすいびょう
かか
に罹ると、実に恐ろしいものになってしまいます。この病気に罹った犬を狂犬と云いま
す。どんな立派な小屋に棲む高価な犬でも、台所や塵溜を探し廻る犬でも、狂犬にな
なったら、猛獣よりも危険な動物になります。野良犬が最も罹りやすいのですが、かい
いぬ
犬でも野放しにして、勝手に出歩かせることから、この病気を引き受けて来ることが多
いのです。

きょうけんびょう
狂犬病は名が示すように、犬が気狂いになる病気ですが、犬ばかりではなく、人間

を初め、馬、羊、猫、兎などまで犯される恐ろしい病気です。此の病気に罹ると、犬は何のわけもなく噛みつき度くなり、ただ噛みつこう噛みつこうと苦しみ廻ります。尾を両足の間に挿み、毛を逆立てて、口からは泡を出し、何でも一番先に目についた動物に跳びかかり噛みつきます。そして噛まれた動物が病気に伝染して行きます。

然し狂犬は何時でも怒り狂って、走り廻るものではありません。罹り初めは決してそんなことをしないで、何だか判らない恐怖に襲われ、人に助けを求めるように甘えて来ます。こんな時うっかり傷のある所を舐められたり、一寸歯を立てられて犬の涎が私達の体に入ると、やがて人間も恐水病になるのですから、危険此の上もありません。

狂犬は水を見ると火がついたように恐れると云われていますが、始めは決してそうではなく、却って前よりも沢山水を飲むものです。水さえ見ればむさぼるように飲みます。併し段々病気が重くなると、水が咽を通らなくなり、そうなると始めて水を恐れて逃げ出すようになるのです。

病気の重くなった狂犬ならば、変な物を食べたり、遠吠えをしたり、物にやたらに噛みつきますから、すぐそれと見当が付きませんが、始めの間は容易に判りませんから注意しなければいけません。ですからどんな犬にでも噛まれた時はすぐ医者へ行って、注射してもらわぬと大変です。狂犬に噛まれても、手遅れにさえならなければ大丈夫です。科学は恐ろしい恐水病を征服しましたから。



日本犬の代表シバイヌ

参考図版：京王電鉄 HP、『小学館の図鑑 NEO・動物』『同・鳥』（小学館）、

『原色魚類大図鑑』『原色少年動物図鑑』（北隆館）他

※ 前号『動植物界の奇観』に続き珍しい鳥獣と、今回は病気をもたらす動物の記事から、いくつかご紹介しました。出版当時の社会情勢も窺えます。

谷田専治（たにた せんじ、1908－1994）・おもな著書

「動物界の不思議」（偕成社、1938）

「細菌物語」B.B.メイ著・永野為武・谷田専治共訳（青木書店、1940）（文化叢書第6）

「白蟻談義」（原名「白蟻の心」）マレーズ著・永野為武・谷田専治共訳編

（日新書院、1941）（カバー表と背は次ページ）

「熱帯の景観」ウォーレス著・谷田専治訳（創元社、1942）
（創元科学叢書第 17）

「日本産石灰海綿の研究」（博士論文）（1944）

「みゝずと土」ダーウィン著・谷田専治訳（改造社、1949）
（改造選書）

「噴火湾近海海洋調査報告」谷田専治・田村 正
・小藤英登共著（室蘭市、1950）

「イカとその漁業並びに加工業」谷田専治他共著（北海水産新聞社、1951）

「最新生物学辞典」柘植秀臣・谷田専治・永野為武共編（岩崎書店、1953）

「鮭鱒とその漁業並びに加工業」谷田専治他共著（北海水産新聞社、1953）

「貝の採集」（岩崎書店、1954）（少年の観察と実験文庫 73）

「生物の辞典」柘植秀臣・谷田専治・永野為武共編（岩崎書店、1956）

「水産動物学」（恒星社厚生閣、1960）（水産学全集第 8）（1984 新版）

「動物系統分類学第 2 巻」内田亨・監修（中山書店、1961）より「海綿動物」

「松島湾のカキ以上変形について」谷田専治・佐野孝（日本水産学会、1962）

「少年の観察と実験文庫 29」（岩崎書店、1964）

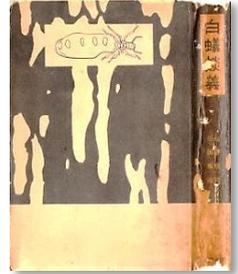
「水産増養殖叢書 25・日本海における増養殖」日本水産資源保護協会編
（日本水産資源保護協会、1973）

「水産増養殖用語事典」谷田専治・島津忠秀共編（緑書房、1975）

「見果てぬ夢は水産の夢」（緑書房、1984）

「熱帯の自然」A.R.ウォーレス著・谷田専治・新妻昭夫共訳
（平河出版社、1987 のち筑摩書房、1998）（ちくま学芸文庫）

「相模湾産尋常海綿類」（解説担当）（生物学御研究所編・皇居内生物学御研究所、1989）



自然観察クラブ 会費納入のお願い

- ☆ 年会費（個人または家族） 1,800 円
- // （会報不要または直接取りに来られる方） 600 円
- ※ 会報はインターネットでご覧になれます。

☆ 会費の主な用途

会報発行・発送用諸経費（郵送料、封筒・印刷用紙、
インク代等）、プリンター保守費用、臨時催事の通信、その他

茶臼山・毘沙門山ハイキングと
今市宿・二宮尊徳に因む社寺史跡めぐり

1月18日(日) 天気・晴れ

今市宿の北側に、日光連山の前衛のようにそびえる山なみ、茶臼山と毘沙門山に登りました。鹿沼より北のこの辺は里も山も何日か前の雪にうっすらと覆われ、落葉と残雪で滑りやすい足場に用心深さを要する行程が続きます。

前日、同行予定の佐々木茂氏から情報が入り、明日登る山は倉ヶ崎城という山城跡とのこと。日光山が倉ヶ崎、大桑など付近一帯を支配した永正年間(1510年代)に、拠点として築いた山城ではないかと考えられているそうです。戦乱期には、壬生城主、壬生綱重の子で、壬生徳節齊の弟である大門弥二郎が、宇都宮国綱の命により城主を務めていましたが、日光山、宇都宮城、鹿沼城の三勢力が複雑に入り組んだ攻防戦が展開され、倉ヶ崎城は日光山の僧兵に攻め滅ぼされました。

実際登ってみて、^{くろわ}郭、^{ほりきり}堀切、^{こぐち}虎口、^{いぬばり}犬走などと佐々木氏からの説明を聞くと、なるほど、確かにそれが自然の地形ではなく、人が造ったものであることがわかります。自然の土や岩を掘っただけの遺構でありながら、500年も前に造られた山城が今もその形を残しているのです。



茶臼岳山頂にて

低いけれど結構難儀しました

大きな四角い中継アンテナが頂を占拠する毘沙門山からは、“3羽のニワトリ”すなわち落合・長畑の^{ひいめいざん}鶏鳴山、塩谷・船生の^{にわとりだけ}鶏岳、同じく塩谷の^{けいちょうざん}鶏頂山、もちろん日光連山も間近に望むことができ、双眼鏡では東京のスカイツリーも確認できました。

下山後、杉並木公園に車を置いて、朝鮮通信使今市客館跡、滝尾神社から宿場町の霧田気を残す今市の町を歩いて、報徳二宮神社、如来寺等を見学し、帰路に着きました。

※ 参加者

佐々木伸二・千洋・真澄・茂・理恵、石崎隆史・裕子、阿部良司・みゆき

(計9名)

❁ 見た植物(50音順)

(落葉樹) アオダモ、アオハダ、アカシデ、アブラツツジ、イヌブナ、ウラジロノキ、
オノオレカンバ、コシアブラ、コナラ、ヌルデ、ネジキ、ホオノキ、モンゴリナラ、
ヤシャブシ、ヤマツツジ、リョウブ

(常緑樹) シラカシ、テイカカズラ、ヒサカキ、ヤブコウジ (実、写真↓)

(針葉樹) アカマツ、スギ、ヒノキ、モミ



❁ 見た・聞こえた鳥

スズメ、セグロセキレイ、ドバト、ハクセキレイ、
ハシブト (ボソ?) ガラス、ヤマガラ、ルリビタキ

❁ 茶臼山ハイキングと今市宿散策の風景



登山道入口 (左) と
うっすら雪と落葉に覆われた滑りやすい道



足場に注意しながら
急下降の下り道



毘沙門山山頂にて



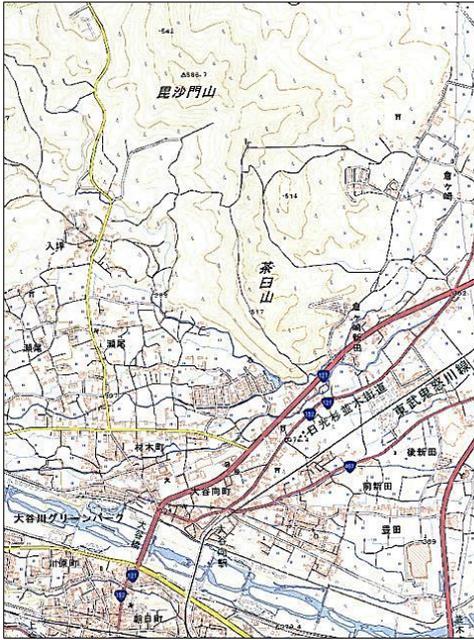
山頂の視界を遮る“アンテナ”



南の地平はるかに
東京スカイツリーが…

毘沙門山から眺める
高原山方面の
雪山風景
風の強い日だったが
山の上は
もっと激しい風
を思わせる雪煙





←地図中央に、かつて地形を生かした山城・倉ヶ崎城が築かれた茶臼山。日光街道・例幣使街道・会津西街道が合流する交通の要衝・今市宿を見下ろす場所柄、戦国時代や、幕末の戊辰戦争などたびたび戦場となった。現在麓にはのどかな田園風景が広がる。



自然の地形と思いきや
戦国時代に人が手を加えて城となり、
戦場となった(負け戦でした)跡とは…



堀切(ほりきり)の跡と
思われる鞍部



郭(くるわ)の跡と思われる平地



今登ってきた山々
毘沙門山(左)山頂には
白い四角いアンテナが…



今市宿付近の日光杉並木
所有者の名札がある木も
「鹿沼市」もありました



今市の報徳二宮神社
冬の茅の輪くぐりです
(「茅の輪」は本来夏に盛ん)

❁ 木の幹図鑑



キノコの生えた枯木



オノオレカンバ



ウラジロノキ



モミの大木



アカマツの大木



アカマツを見上げる



日光杉並木の1本、「鹿沼市」の名札が…



📷 Photo Report 栃木 📷

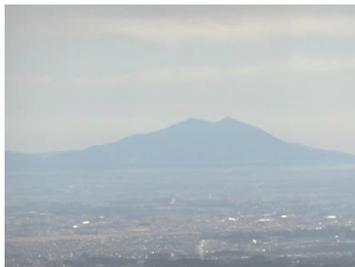
自然観察クラブの山行常連で、昼食に焼きソーセージをご提供いただくなど貢献下さっている石崎さんより、ファミリー登山の報告をいただきました。

古賀志山レポート

高気圧におおわれ、快晴となった1月4日、家族親類4人連れで古賀志山に登りました。森林公園の釣堀に車を置いて出発。沢沿いの北登山道を登って富士見峠へ。古賀志山山頂から稜線上の道ははしご場もありましたが、無事に見晴らしの良い御嶽山に到着。奥白根山をはじめ日光連山や高原山、八溝山から加波山、筑波山へ至る茨城県境の山々、お正月は空気がきれいなので、真っ白な富士山も見ることができました。鹿沼市街地からは見ることのできない皇海山をはじめ足尾の山々も見えました。帰りは古賀志山まで戻って、山頂から直接南側に下りる道にtryしてみました。クサリ場もあり、スリル満点の探検でした。 (石崎隆史)



古賀志山山頂から日光連山を望む



南方はるかに筑波山も



展望台にて



筑波山から東へ
加波山（右）足尾山（中央）などの山並みと宇都宮市街



展望台で度胸試しのジャンプ！



古賀志山山頂



御嶽山山頂
こちらの方が眺めは良い



御嶽山手前のはしご
高所苦手の方は要注意！

板荷大原の天満宮と樺ポッチ

—昨年であったか、当店のお客様で、元中学校教諭の福田敦先生がムクロジの実を持って来て下さった。本誌創刊号にムクロジのことが書いてあったから、とのことであつた。昨年の秋、上都賀病院を奥様と一緒に出てこられるところでたまたまお会いしたので、かのムクロジについて訊くと、その木は福田先生の庭に植えられたもので、それほど大きなものではないという。その後また来店された時に、板荷に何か大きな木がないかご存じかと訊ねると、先生は喜んで教えて下さった。僕はその話に耳を疑った。

板荷大原のバス停のそばに先生のお住まいがあり、その道を入れて正面に天満宮がある。そこから背後にある山に登ると“樺ポッチ”という山があつて、その山頂の近くにツガの木がある、というのだ。古峰ヶ原の三枚石新道のかなり上の方にもそれらしいのがあるが、ツガなのかあるいはコメツガなのかは確認していない。いずれにしても板荷のような低山に本当にツガの木があるのだろうか。

その後福田一男先生が来店された時に、古峰ヶ原のツガについて訊ねると、古峰ヶ原のものはツガであり、コメツガは鹿沼では見たことがない、という。

そんなことを、大原に実家があり現在も板荷にお住まいの福田君子さんに話すと、さっそく天満宮に案内してもらえることになった。君子さんの実家は天満宮のすぐ近くなのである。兄上の阿部芳次氏を伴って出掛けると、山の麓には広く獣を防ぐためのネットが張られており、その扉を開けるとすぐ天満宮があつた。本殿は囲いの中にあつて、ネット越しにであるが見事な彫刻が見える。しかもその彫刻は、上材木町およびわが戸張町の屋台の彫刻と同じ彫師、石塚知興によるものであるらしい。この日は夕暮れが近くなり、イノシシが出るというので樺ポッチに行くのはやめにしたが、芳次氏が「ツガモミ」と言っておられたのが気になった。ツガではなくてモミなのではないかと。

1週間後、樺ポッチに登るべく再び出掛けた。天満宮から適当に小尾根に取り付いて登ると主尾根に出る。コナラ、モンゴリナラ、ヒノキ、アカマツを主とした森である。右に登って行くとほどなく樺ポッチの山頂である。天満宮から15分程。山頂には大した立木はない。尾根は左方向にさらに続いているようである。太めの木々を1本1本見ながら進むと、左にモミのような木が見つかった。この木かも知れないが、

(次ページへ続く)

判断材料の葉は低い所にはない。双眼鏡は忘れた。下に枝が落ちていないか探したが、それらしい枝もない。代わりにモミの幼樹が見つかった。やはりモミかな、と思いながら、そうだ、デジカメでどうにかなるかと思いつき、望遠を最大にしてピントを合わせた。すると、画面に映し出された葉は手持ちで当然ぶれているが、明らかにツガである。葉の長さが長短まちまちなのはモミも同じだが、全体的にモミより短く、しかし葉の幅はモミよりも広い。そして葉の先端はまるい。胸高周囲 160cm である。

こんな低山にツガがあるものなのか。図鑑によると、ツガとコメツガの違いはまず若枝の先端にある。コメツガは若枝に毛が生えており、ツガには毛が生えていない。分布はツガが丘陵～山地、コメツガが亜高山帯、というからここにツガがあってもおかしくはなく、高木が 2 本、幼樹が数本あるから野生であることも肯ける。

大原天満宮は毎年 1 月 15 日の前の日曜日が御開帳とのことで、今年は 1 月 11 日。朝 8 時に扉が開くとのことなのでまた出掛けた。毎年順繰りで決められた班が扉を開けて供え物をするのである。他の鎮守の例にもれず、ここでも社伝を知る人は少なくなっているようである。この日も“樺ポッチ”まで登り、車を置かせてもらった阿部芳次さんの家に戻った。縁側には芳次さんと君子さんの父上の阿部忠次さんがおられ、お茶をいただきながら、大芦と板荷境にそびえる羽賀場山に連なる天気ポッチ（お天気山）、日蔭山（おろやま）さんなどの山名を聞く。忠次さんの話ではツガは樺ポッチの山頂にあり、ふたかかえもある太さで、根元付近が傷んでいる、とのことである。僕の見たとツガとは様子が違う。もしやかつて山頂部にもっと太いツガがあったものの、すでに枯れてしまったのではないかと考えた。

1 月 25 日、会報でモミとツガの葉の違いを解説するための標本を取ろうと、三たび樺ポッチへ。前日、韓国でスーパーに入り込んだイノシシが大暴れした映像を見たのでちょっと恐怖。それでも今日は、樺ポッチより先に別のツガの木がないか調べてみたい。樺ポッチを越え、先に発見したツガの木を左に見て、しばらくならかな尾根が続く。別の尾根と合流したりして単純な地形ではなく、斜面はしだいに急になってくる。前方、コナラの林の中にヒノキとは異なる針葉樹の高木が見える。その先はならかな山の山頂のようである。近づくにつれ、その高木がかなり太い木であることがわかってきた。御神木が鎮座するのはほぼ山頂部。ツガであることは確実だが、一応デジカメで葉を確認。胸高周囲 220cm。太さも枝振りも巨樹の風格がある。この地こそ真の樺ポッチであった。



最初のツガを
見つけたピーク



板荷・大原天満宮正面と
←解説板
↓御開帳当番の面々と



天満宮の裏山はオカメザサの笹原で始まる



石塚知興作と思われる彫刻のひとつ



イヌガヤ



モミ



ツガ

似ているようで違う針葉樹の葉

ツガの葉のアップ→



大原天満宮付近から眺められる
板荷と大芦との境の山並
中央付近が天気ボッチ、右におろやま→





↑モミ
↓フジ

(中の木は枯れた後)



↑ヒノキ
↓手前のピークのツガの大木



桐ボッチのツガ→

↓右のツガのアップ



山書談話室

恒例、田部重治研究会・白坂正治氏からのおたよりです。

寒中御見舞申し上げます。

月報、号を重ねること第30号。新年最初の号でもあり、益々めでたいですね。通過点ではありましようが、毎号毎号様々な企画をされ、呼びかけられ、響きを伝えられての積み重なりの光輝に心より敬意を表します。

活動を通して少年少女に育まれる情操の泉は長じてからもこんこんと湧き出て、日々をひからびさせることなく豊かな感性で潤わせることでしょう。仮にITで人の心は読めても、詠めはしない。まして魂のひだに触れるなら、例えば路傍の〇〇(読み取れず申し訳ありません:編集担当)歓喜を求めて“歩く、ひたすら歩く”しかないのです。

ある面、芳賀富士山の如く“低くて深い”1年になったら幸せだと思います。

乱筆乱文にて。

'15.1.17



愛書家のひとりごと

「登山者がぜひ読んでおきたい—山の名著 BEST100」より
日本山書の会編（「山と溪谷」1976年1月号付録）

《論説》	（書名／編著者名／初版出版社／初版出版年）		
日本風景論	志賀重昂	政教社	明治 27
日本山水論	小島烏水	隆文館	明治 38
山岳省察	今西錦司	弘文堂書店	昭和 15
《調査・研究》			
日本山嶽志	高頭 式	博文館	明治 39
やま	志村烏嶺・前田曙山	橋南堂	明治 40
山の人生	柳田國男	郷土生活社	大正 15
山 研究と随想	大島亮吉	岩波書店	昭和 5
尾瀬と鬼怒沼	武田久吉	梓書房	昭和 5
先蹤者—アルプス登山者小伝	大島亮吉	梓書房	昭和 10
谷川岳	東京登山歩流会	弘明堂書店	昭和 11
山と探検	今西錦司	岡書院	昭和 25
谷川岳研究	長越茂雄	朋文堂	昭和 29
日本アルプスの自然	小林国夫	築地書館	昭和 30
山と書物 正統	小林義正	築地書館	昭和 32・35
登山の小史と用具の変遷	西岡一雄	朋文堂	昭和 33
登山の夜明け	熊原政男	朋文堂	昭和 34
日本登山史	山崎安治	白水社	昭和 44
近代日本登山史	安川茂雄	あかね書房	昭和 44
ヒマラヤの高峰	I II III 深田久弥	白水社	昭和 48
《随想》			
屋上登攀者	藤木九三	黒百合社	昭和 4
泉を聴く	西岡一雄	朋文堂	昭和 9
句集 山行	石橋辰之助	沙羅書店	昭和 10
山の繪本	尾崎喜八	朋文堂	昭和 10
山の憶ひ出 上下	木暮理太郎	龍星閣	昭和 13・14
たった一人の山	浦松佐美太郎	文藝春秋社	昭和 16
静かなる登攀	高須 茂	朋文堂	昭和 16
回想の山山	桑原武夫	七文書院	昭和 19
山岳湯仰	中村清太郎	生活社	昭和 19
山なみはるかに	三田幸夫	白水社	昭和 29
山靴の音	芳野満彦	朋文堂	昭和 34
北八ツ彷徨	山口耀久	創文社	昭和 35
山を想へば	百瀬慎太郎遺稿集刊行会 遺稿集刊行会		昭和 37
わが山旅五十年	田部重治	桃源社	昭和 39
森林・草原・氷河	加藤泰安	茗溪堂	昭和 41
山に忘れたパイプ	藤島敏男	茗溪堂	昭和 45
明治の山旅	武田久吉	創文社	昭和 46
遙かな山やま	泉 靖一	新潮社	昭和 46

《紀行・記録》

西藏旅行記 上下	河口慧海	博文館	明治 37
日本アルプス 一〜四巻	小島烏水	前川文栄閣	明治 43・44・45・大正 4
アルペン行	鹿子木貞信	政教社	大正 3
日本アルプスと秩父巡礼	田部重治	北星社	大正 8
スウィス日記	辻村伊助	横山書店	大正 11
山行	榎 有恒	改造社	大正 12
静かなる山の旅	河田 禎	白彊館書店	昭和 2
大利根水源紀行	利根水源探検隊	煥乎堂	昭和 2
黒部溪谷	冠松次郎	アルス	昭和 3
山へ入る日	石川欣一	中央公論社	昭和 4
ハイランド	辻村伊助	梓書房	昭和 5
氷河と万年雪の山	小島烏水	梓書房	昭和 7
霧の旅	松井幹雄	朋文堂	昭和 9
わが山山	深田久弥	改造社	昭和 9
北の山	伊藤秀五郎	梓書房	昭和 10
アルプス記	松方三郎	龍星閣	昭和 12
ナンダ・コット登攀	竹節作太	大阪毎日新聞社	昭和 12
樹林の山旅	森本次男	朋文堂	昭和 15
ペテガリ岳遠征記	小島六郎	サン書房	昭和 23
屏風岩登攀記	石岡繁雄	碩学書房	昭和 24
マナスル I・II	日本山岳会	毎日新聞社	昭和 29・33
チョゴリザ	京都大学学士山岳会	朝日新聞社	昭和 34
登攀者	第 2 次 R・C・C	山と溪谷社	昭和 38
日本百名山	深田久弥	新潮社	昭和 39
青春を山に賭けて	植村直己	毎日新聞社	昭和 46
《技術》			
岩登り術	藤木九三	RCC 事務所	大正 14
岩登り術	水野祥太郎	黒百合社	昭和 8
積雪季登山	勝田 甫	朋文堂	昭和 18
《案内》			
富士案内	野中 至	春陽堂	明治 34
穂高岳登攀ルート図集	諏訪多栄蔵	朋文堂	昭和 24
穂高の岩場 I・II	岩稜会	朋文堂	昭和 34
《遭難》（私家版遺稿集・追悼出版など出版形態は多様）			
山之犠牲	小山 博	小山 博	大正 5
遺稿（山と雪の日記）	板倉勝宣	（梓書房）	（昭和 5）
剣沢に逝ける人々	東京帝国大学山の会	梓書房	昭和 6
伊那谷 木曾谷	細井吉造	故細井吉造遺稿集刊行会	昭和 12
単独行（單獨行）	加藤文太郎	朋文堂（津田周二）	昭和 16（昭和 11）
風雪のピヴァーク	登歩渓流会	登歩渓流会	昭和 25
《画文集・写真集》			
山・原野・牧場	坂本直行	竹村書房	昭和 12
山に描く	足立源一郎	古今書院	昭和 14

山旅の素描	茨木猪之吉	三省堂	昭和 15
霧の山稜	加藤泰三	朋文堂	昭和 16
尾根路	田淵行男	朋文堂	昭和 33
日陰の山ひなたの山	上田哲農	朋文堂	昭和 33
山のABC 一～三	串田孫一	創文社	昭和 34・37・44
《翻訳・洋書》 (右端は翻訳者名)			

Handbook for Travellers in Japan in Central and Northern Japan

	Satow,E.M. and Howes,A.G.S.	KELLY & WALSH	明治 14
日本アルプス・登山と探検	ウォルター・ウェストン	梓書房	昭和 8 岡村精一
アルプス登攀記 上下	エドワード・ウィンパー	岩波書店	昭和 11 浦松佐美太郎
岩・氷・ランプ	ジャン・コスト	朋文堂	昭和 12 高須 茂
一登山家の思ひ出	エミール・ジャベル	龍星閣	昭和 12 尾崎喜八
処女峰アンナブルナ	モーリス・エルゾーク	白水社	昭和 28 近藤 等
エヴェレスト登頂	ジョン・ハント	朝日新聞社	昭和 29 田辺主計・望月達夫
ナンガ・バルバット	K.M.ヘルリヒコッフ	朋文堂	昭和 29 横川文雄
星と嵐	ガストン・レビュファ	白水社	昭和 30 近藤 等
アルプスの三つの壁	アンデル・ヘックマイヤー	朋文堂	昭和 30 長越茂雄
八千米の上と下	ヘルマン・プール	朋文堂	昭和 30 横川文雄
アルプス及コーカサス登攀記	A.F.マンメリー	朋文堂	昭和 13 (昭和 30) 石 一郎
エヴェレストーその人間の記録	ウィルフリッド・ノイス	文藝春秋新社	昭和 31 浦松佐美太郎
アルピニズム・アクロバチコ	ギド・レイ	朋文堂	昭和 31 河合 享
第三の極地	G.O.ディレンフルト	朋文堂	昭和 31 諏訪多栄蔵
わが山の生涯	トム・ロングスタッフ	白水社	昭和 32 望月達夫
ヒマラヤーその探検と登山の歴史	ケニス・メイスン	白水社	昭和 32 田辺主計・望月達夫
白い蜘蛛	ハインリヒ・ハラ	白水社	昭和 35 横川文雄
未踏の山河	エリック・シブトン	茗溪堂	昭和 47 大賀二郎・倉知 敬

鹿沼の自然・栃木の旅 月報第31号

2015年2月発行

北光・自然観察クラブ 鹿沼

鹿沼市戸張町1818

(クリーニングハウスあべ内)

発行人 阿部 良司

携帯 090-1884-3774

FAX 0289-62-3774

携帯 ☎ shizenclub.2006@docomo.ne.jp

E-mail a2b5r7j7@one.bc9.jp



ホームページでもご覧になれます→

クリーニングハウスあべ

